



非意図的な事象による事態の描写と責任意識の関係 ：日本語・ハンガリー語の考察から（西光義弘名誉 教授追悼号）

吉成, 祐子
江口, 清子

(Citation)

神戸言語学論叢, 12:144-157

(Issue Date)

2020-03-26

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012202>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012203>



非意図的な事象による事態の描写と責任意識の関係 —日本語・ハンガリー語の考察から—¹

吉成 祐子・江口 清子

岐阜大学・宮崎大学

1. はじめに

本研究は、因果関係のある事象連鎖を説明する際の言語表現について分析・考察を行うものである。特に、非意図的な原因により望まない結果が引き起こされる事象連鎖を描写する言語表現に注目する。たとえば、飲みかけのコップをうっかり倒して本にコーヒーをこぼしてしまう、地震で花瓶が棚から落ちて割れてしまう、などである。望まない結果に至る過程も含めた事象連鎖を描写する際には、さまざまな言語表現が可能である。「コップの転倒」「コーヒーの流出」のような原因事象、あるいは「本の汚れの発生」のような結果事象のいずれか1つへの言及に留まる場合もあれば、これら各下位事象すべてに言及する場合もある。また、「コップが倒れる」「コーヒーがこぼれる」のような自動詞文だけでなく、「コップを倒す」「コーヒーをこぼす」のような他動詞文でも描写される。このようなさまざまな表現パターンの中から、話者はどのような動機でどのように事象連鎖を言語化するのだろうか。

先行研究 (Delancy 1985, Ikegami 1982 ほか) では、事態に対する話者の心理的側面 (責任意識) や、話者が使用する言語によって、事態の描写の言語化には異なる傾向が見られることが指摘されている。本研究では、質問紙による調査が行われた先行研究 (吉成・パルデシ・鄭 2010) を改良・追試することで、上記の指摘は一般化できるのかを検証する。特に注目するのは他動詞文の使用である。本研究が対象とする日本語とハンガリー語は、ともに動詞が形態的に自他対応をなす言語であるが、ハンガリー語では他動詞文における無生物主語が許容されるのに対し、日本語では許容されないという点で両言語は異なる。このような文法制約が非意図的な事象の描写にどのような影響を与えるのかに注目し、それぞれの言語表現について比較・考察を行う。

2. 先行研究

2.1. 日本語とハンガリー語の自他動詞使用

日本語とハンガリー語は、ともに文法関係を接辞によって示す膠着語的特徴を持つ言語であり、どちらも動詞が形態的に自他対応をなす。使役者の意図的な動作の描写には、(1a)のように他動詞が用いられるが、非意図的事態の描写には、(1b)のように自動詞が用いられることが多い。しかし、話者が事態への責任を感じる場合などは、(1c)のように他動詞が使用されることもある。この場合、「～てしまう」という補助動詞とともに用いられることがほとんどである。この補助動詞は一義的には動作の完了を表すが、後悔や残念な気持ちを表す表現としても用いられる。

- (1) a. (周りの注意を引くために) わざとコップを割った。
 b. コップが割れた。
 c. うっかりコップを割ってしまった。

ハンガリー語でも、使役者の意図的な動作については、(2a)のように他動詞が用いられ、非意図的事態の描写においては、(2b)のように自動詞が用いられる。ただし、日本語同様、話者が事態への責任を感じる場合、(2c)のように他動詞が用いられることもある (cf. 江口 2015)。この場合、*szándékosan*「故意に」のような副詞をともなって表現されることが多い。

- (2) a. (*Szándékosan*) *összetör-tem* a *pohar-at*.²
 on.purpose break(TR)-PST.1SG.DEF the cup-ACC
 「(わざと) コップを割った。」
 b. (*Sajnos*) *összetör-t* a *pohár*.
 unfortunately break(INTR)-PST.3SG the cup.NOM
 「(残念なことに) コップが割れた。」
 b. *Véletlenül* *összetör-tem* a *pohar-at*.
 by.chance break(TR)-PST.1SG.DEF the cup-ACC
 「うっかりコップを割った。」

また、日本語の他動詞文の特徴として知られているのが、無生物主語の使用が限定される点である。(3a) で示すように、「風」のような自然現象、すなわち無生物主語の他動詞文は、日常会話などでは不自然な表現であり、通常、(3b) のように自動詞文で表現される。

- (3) a. *風がコップを倒した。
b. 風でコップが倒れた。

一方ハンガリー語では、このような文法上の制約はないため、(4) のように無生物を主語とした他動詞文も可能である。

- (4) *A szél feldönt-ött-e a pohar-at.*
the wind.NOM knock.over-PST.3SG.DEF the cup-ACC
「風がコップを倒した。」

以上のような日本語とハンガリー語の自他動詞文の構造についてはよく知られているが、実際の使用と話者の事態認識との関わりについて検証しているものはほとんどない。

2.2. 事態に対する責任意識と態度表明

相手が損害を被る事態に何らかの関わりを持つ場合、その原因が話者の意図によるものかどうかに関わらず、謝罪の態度を見せることがある。謝罪のストラテジーに関する研究では、Olshtain & Cohen (1983) の談話機能の面からの分析がよく知られている。そこでは、謝罪のストラテジーを、1) 「ごめんなさい」「すみません」「申し訳ありません」などの定型的な謝罪表明の表現 (Illocutionary Force Indicating Devices; IFID)、2) 理由の説明、3) 責任の承認、4) 補償の申し出、5) 自製の約束、と分類している。日本語に関しても、謝罪ストラテジーに関する研究 (羽成2016) はあるものの、具体的にどのような言語形式で説明されるのか、なぜそのような表現が用いられるのかという観点から分析・考察しているものは少ない。ハンガリー語でもIFIDおよびその周辺を談話機能の面から分析する研究が存在し、中でもコーパスを用いた Szili (2003) は重要である。しかし、日本語における研究同様、具体的な言語形式を分析・考察するものではない。

日本語話者は特に、どのような原因であれ、謝罪の態度を見せることが多く、これには事態に対する責任意識 (監督・管理責任等) などの心理的要因が関わっているという指摘がある (Hinds 1986、水谷 1979)。ただし、このような責任意識の知覚や表出は日本語話者に特有のものなのかを明らかにするには、他言語話者との比較が必須である。

本来、非意図的な事象は他動性のプロトタイプ (Hopper & Thompson 1980) から逸脱しているものであるが、それでも言語によってはその描写に他動詞が用いられる。それには有責性が関わっていると説明する研究も多い (Delancy 1985, Ikegami 1982, Nishimura 1993, Jacobsen 1991) が、実際に話者が非意図的な事態に対して他動詞表現を用いた際に責任意識を感じているか否かを確認するには、実験的手法で図るよりほかはない。また、社会心理学の分野で、責任判断にはいくつかの要因 (原因の所在、統制可能性など) が関わってい

ることが指摘されている（Weiner 1995）が、その要因を統制した実験手法になってはいない点に問題が残る。

2.3. 事象連鎖の言語表現

図1は、コーヒーが入っているコップが転倒（原因事象1）、コーヒーが流出（原因事象2）、その結果、そばに置いていた本にシミができる（結果事象）という一連の事象を図式化したものである。この一連の事象が引き起こされる非意図的な原因としては、当事者本人の不注意やめまい、また自然災害などが挙げられる（cf. Yoshinari, Pardeshi & Chung, 2014）。

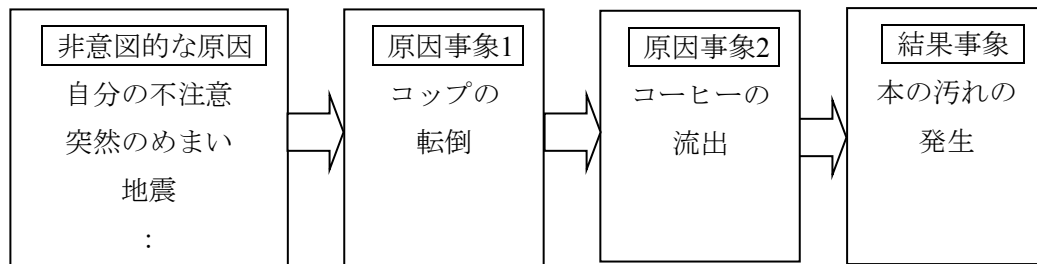


図1. 非意図的な原因によって引きこされる事象連鎖の例

事象連鎖を描写する場合、どの下位事象に言及するのか、またどのような言語表現を用いるのかは、言語によって異なる場合がある。Pardeshi & Yoshinari (2012) では、意図的事象（例：わざとコップを倒す）と非意図的事象（例：うっかりコップを倒す）の映像を用いた実験を行い、日本語とマラーティー語での描写を比較している。その結果、いずれの言語でも、水の入ったコップへの接触（原因事象1）、コップの転倒（原因事象2）、水の流出（結果事象）という事象連鎖のうち、原因事象1と結果事象の組み合わせでの言及がもっとも多かった。また、2つあるいは1つの下位事象にしか言及しない場合でも、結果事象には必ず言及していることも両言語で共通していた。注目されるのは、非意図的事象の描写において、マラーティー語ではほぼすべての事象が自動詞で表現されているのに対し、日本語では原因事象1以外の事象の描写には他動詞が用いられているという違いである。

また、Yoshinari, Pardeshi & Chung (2014) では、日本語と韓国語を取り上げ、質問紙調査を用いて、図1のようなさまざまな非意図的な原因で起こる事象連鎖の描写時の表現を分析している。その結果、原因の種類によって違いがあるものの、言及する下位事象の組み合わせは言語間で異なること、また、韓国語に比べて日本語のほうが、他動詞をより多く用いていることが明らかにされた。吉成・パルデシ・鄭 (2010) は、Yoshinari, Pardeshi & Chung (2014) の基礎となる質問紙調査を行なったものであるが、日本語・韓国語・マラーティー語を対象としたもので、提示される非意図的な原因が異なる。1文中で用いられた自動詞・他動詞の数を比較したところ、マラーティー語、韓国語、日本語の順で他動詞の使用が多くなり、かつ自動詞の使用が同じ順で少なくなることが明らかにされた。さらに、場面に

対する責任意識の評定結果と合わせ、規範から外れる非意図的な事象における他動詞使用について、話者の事態に対する意識、特に責任意識が関わっていると主張している。

吉成・パルデシ・鄭 (2010) および Yoshinari, Pardeshi & Chung (2014) では、質問紙を用いて、非意図的な原因で望ましくない結果を与えることになる場面での言語表現と、その場面に対する責任意識について調査している。その結果、非意図的な原因によるものでも、特に日本語話者は責任意識を強く感じており、また、さまざまな言語話者も、非意図的な原因の種類によって責任を意識する傾向が異なることが明らかにされている。しかし、そもそも、非意図的な事象であるにもかかわらず、なぜ責任意識を感じるのだろうか。また、何が責任意識を感じる原因なのだろうか。それらを探るためにも、統制された言語実験を行い、検証する必要がある。

2.4. 研究課題

先行研究では、質問紙調査を用いて、責任意識と自他動詞使用との関わりに注目して事象連鎖における言語化の傾向が検証されてきた。責任意識が具体的に何と関わるのかを明らかにするためには、非意図的な原因を統制して提示する必要がある。また責任意識が言語表現に関わるのは、自他動詞の選択だけなのかも検証する必要がある。

そこで本研究では、非意図的な原因により望まない結果が引き起こされた事象連鎖を描写する言語表現と責任意識との関わりについて、日本語とハンガリー語を対象に検証を行った。一連の事象連鎖で起こる、因果関係が明らかな事態を説明する際に、原因帰属の要因や、話者の事態に対する知覚、すなわち責任意識が、言語表現にどのように影響を与えるのかを明らかにする。研究課題は大きく以下のようにまとめられる。

- 1) 原因の所在が責任意識への知覚に関わるのか。それは日本語話者・ハンガリー語話者同様の傾向なのか。
- 2) 日本語・ハンガリー語話者は同じように事態を説明するのか。どの事象にどれくらい言及し、各下位事象の言語化には自動詞・他動詞どちらが使用するのか。

3. 実験調査

3.1. 調査方法

本実験では、日本語話者である大学生100名（男性48名、女性52名）、ハンガリー語話者である大学生100名（男性26名、女性74名）を対象に、それぞれの言語で質問紙調査を行った。友達に被害を与えてしまう4つのシナリオ（「友達に借りた本にシミをつける」「友達の部屋のカーペットにワインをこぼす」、「駐車場で友達の車に傷をつける」、「借りていたCDを割る」）を設定し、その要因として原因の所在（内的／外的）、統制可能性（可能／不可能）を組み合わせた4つの条件を設定した。本稿で分析対象としたのは「友達に借

りた本にシミをつける」シナリオ（以下「BOOKシナリオ」と呼ぶ）である。そこでは、以下の4つの条件が設定された。

表1. BOOKシナリオで設定された4つの条件

	統制可能	統制不可能
内的要因	「自分の不注意で」	「めまいがして」
外的要因	「隣の人の手が当たって」	「強い風が吹いて」

4つのシナリオと4つの条件を組み合わせると、全部で16の場面が設定されるが、シナリオと条件が重ならないよう、1つの質問紙には4場面を提示することとし、4パターンの質問紙を作成した。なお、状況説明のための場面の提示には自動詞のみを用いた。具体的な提示文は (5) の通りである。下線の部分を設定されたそれぞれの条件を変えて提示している。

- (5) あなたはコーヒーを飲みながら本を読んでいました。コップを取ろうとした時、自分の不注意でコップに手が当たり、本にコーヒーのシミができました。その本は友達から借りていたものでした。

質問紙は記述式で、回答には、まず、被害者となる友達にこの事態をどのように説明するのかを自由に記述してもらった。さらに意識調査として、7段階の評価尺度を用い、事態に対してどのくらい責任を感じるかという責任意識（責任がない：1－責任がある：7）、その事態を避けることができたと思うかどうかという回避可能性（避けられなかった：1－避けられた：7）、そして、原因の所在を確認するためにも、原因は自分自身にあると思うかどうか（私に原因がない：1－私に原因がある：7）を評定してもらった。

3.2. コーディング方法

自由記述における表現は、自他動詞のどちらが使用されているのかによってコーディングされる。コーディング基準として、表2に、事象ごとに使用される各言語の動詞の例をまとめる。

表2. 日本語・ハンガリー語における各事象を説明する際に用いられる自動詞・他動詞例

	事象	日本語	ハンガリー語
原因事象1	コップの転倒	倒れる／倒す	<i>feldől / feldönt</i>
原因事象2	コーヒーの流出	こぼれる／こぼす	<i>kiömlik / kiönt</i>
結果事象	本の汚れの発生	汚れる／汚す シミがつく／シミをつける	<i>összekoszol / koszos lesz</i> <i>összefoltos / foltos lesz</i>

(6)、(7) にコーディング例を記す。日本語の例 (6) では、原因事象1と結果事象の2つの事象への言及があり、前者では他動詞、後者では自動詞が用いられている。ハンガリー語の例 (7) では、原因事象2と結果事象の2つの事象への言及があり、前者では他動詞、後者では自動詞が用いられている。

(6) 急に目まいがして、手がコップに当たって、コップを倒してしまったんです。それで
原因事象1：他動詞

本にコーヒーのシミがついちゃって・・・。

結果事象：自動詞

(7) *Ne haragud-j, hirtelen rosszul lettem és kiborít-ott-am a kávé-t,*
not get.angry-IMP suddenly badly become.PST.1SG and upset-PST-1SG.DEF the coffee-ACC
原因事象2：他動詞

így foltos lett a könyv-ed.
accordingly spotted become.PST.3SG the book-2SG.NOM

結果事象：自動詞

「怒らないで、突然気分が悪くなって、コーヒーをひっくり返して、それで君の本がシミになったんだ。」

4. 実験結果

4.1. 責任意識との関わり

実験参加者は事態に対してどの程度責任を感じているのだろうか。図1は、日本語話者グループ、ハンガリー語話者グループがそれぞれの条件で起こった事態に対して、自分にどれくらい責任があると思うのかを評定した結果を比較して表したものである。

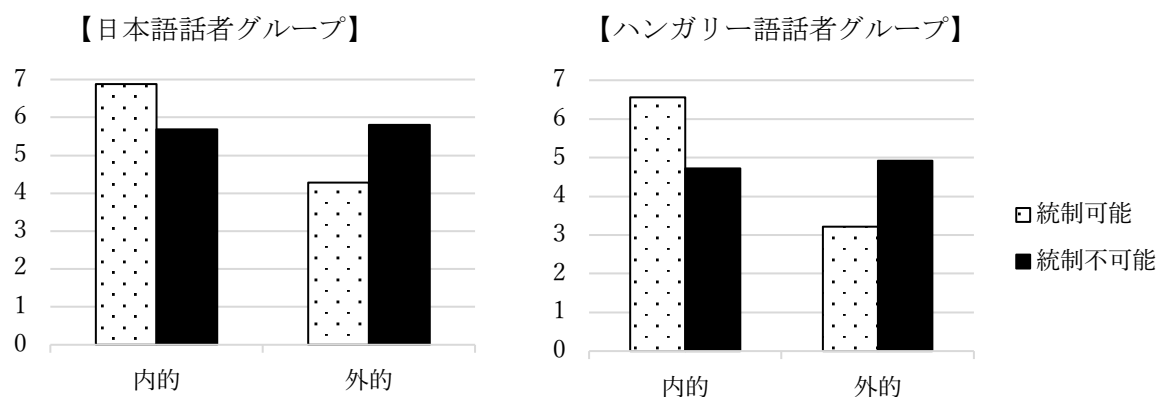


図1. 各条件における責任意識の評定

事態に対する責任意識の知覚の評定を言語グループ×原因所在×統制可能性で分散分析を行なったところ、言語グループ、原因所在で主効果が見られ ($F(1,192) = 14.78, p < 0.01$, $F(1,192) = 54.90, p < 0.01$)、原因所在と統制可能性間で交互作用が見られた ($F(1,192) = 59.52, p < 0.01$)。この結果より、4つの条件すべてにおいて、日本語話者グループの評定の方が、ハンガリー語話者グループの評定よりも高く、日本語話者は、ハンガリー語話者に比べ、各事象に対して責任意識を強く感じる傾向があることがわかった。

ただし、両グループで、責任意識に対する同様の傾向、すなわち、統制不可能な場合、原因の所在が内的であれ外的であれ、責任意識に差がないということも観察された。この結果において、外的×統制不可能な場面での責任意識の高さは興味深い。原因が内的なものの場合、統制可能な要因（不注意）のほうが統制不可能な要因（突然のめまい）よりも責任意識を高く評定する傾向は両グループで観察される。一方、原因が外的なものの場合は、統制不可能な要因（突風）のほうが、統制可能な要因（第三者）に比べて、より責任意識が高くなる。これは両グループに共通して見られる傾向である。言い換えると、両グループともに、望ましくない結果が自然現象によって引き起こされる場合、第三者の不注意によって引き起こされる場合よりも、責任を強く感じる傾向が見られる。

次に、責任意識と謝罪方法との関連性について見てみる。図2は日本語話者グループとハンガリー語話者グループが各条件で使用したIFIDの割合を示している。つまり、「ごめん」「許して」「怒らないで」などの典型的な謝罪フレーズがどのくらいの割合で使用されているのかを示すものである。

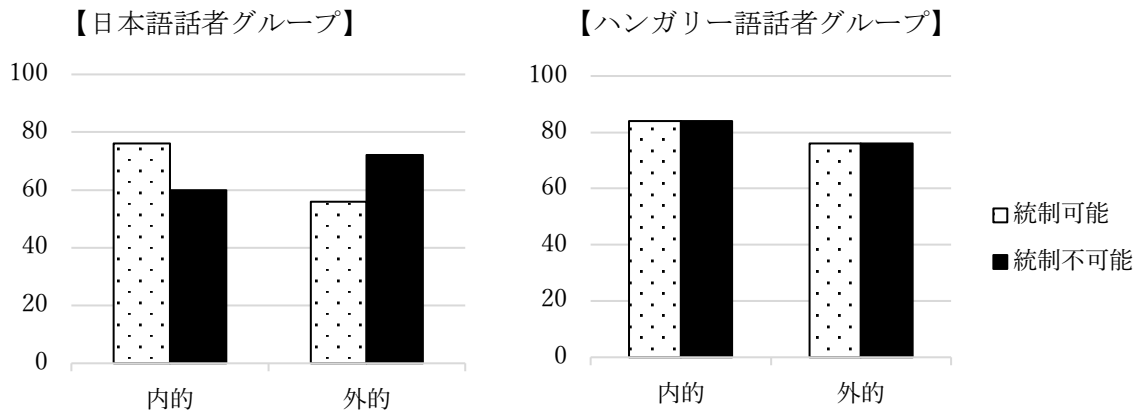


図2. IFIDの使用割合 (%)

図2を見ると、条件別の使用割合の傾向が、両グループ間で異なることがわかる。また、図1の責任意識の評定と見比べてみると、日本語話者グループの責任意識とIFIDの使用とに相関関係が見られる点が注目される。つまり、責任意識が高く評定されていた条件では謝罪表現を用いる割合も高くなっている。一方、ハンガリー語話者グループでは責任意識とIFID使用傾向の間で相関関係は見られない。しかし、ハンガリー語話者グループは日本語話

者グループよりも多くIFIDを使用しているという結果から、ハンガリー語話者は、責任意識に関係なく謝罪表現を用いる傾向にあり、その使用頻度が日本語話者より高いといえる。

4.2. 各下位事象への言及

言語表現について、事象連鎖のうち、どの下位事象に言及することが多いのかを見てみよう。本研究で分析の対象とした「コーヒーがこぼれて本にシミができる」という事態では、「コップの転倒」が原因事象1、「コーヒーの流出」が原因事象2、「本の汚れの発生」が結果事象である。図3は、4つの条件下での各下位事象への言及回数を示している。

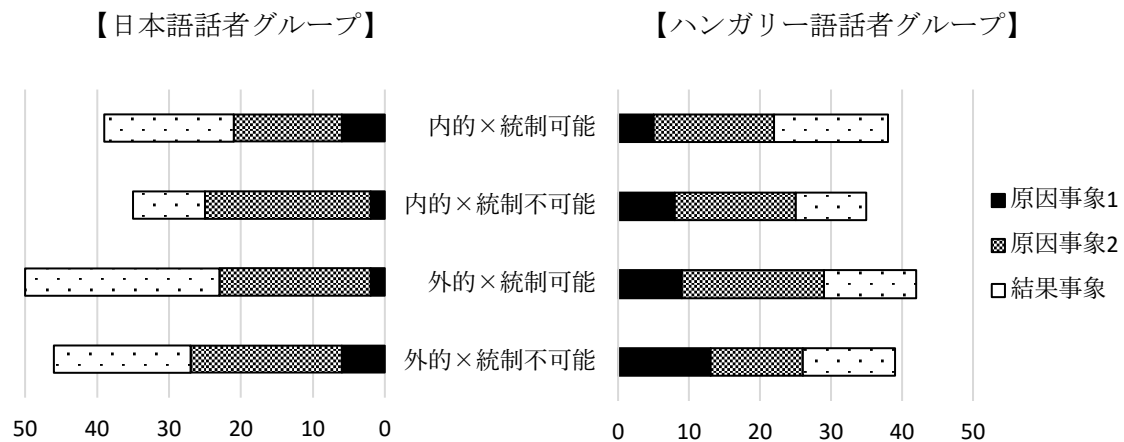


図3. 各下位事象への言及回数 (回)

図3を見ると、両グループともに、各条件下で言及回数に差があることがわかる。全条件の各事象への言及回数を合計すると、日本語では167回、ハンガリー語では147回と差があった。どの下位事象に言及することが多いかを比較するためには、言及回数そのものが異なるため、各事象への言及率を求めたところ、両グループともにもっとも言及の多かった事象は原因事象2「コーヒーの流出」で、日本語では全体の言及回数の47.1%、ハンガリー語では43.5%であった。しかし、他2つの下位事象への言及に差が見られた。日本語話者グループでは、原因事象2「コーヒーの流出」と結果事象「本の汚れの発生」への言及は43.5%と、原因事象2への言及と大差がなかったが、原因事象1「コップの転倒」は9.4%と少なかった。一方、ハンガリー語話者グループでは原因事象1は22.7%、結果事象は33.8%と、日本語のような大きな差は見られなかった。

4.3. 他動詞の使用

次に、図4は 4つの条件下で各下位事象における他動詞使用の累積数を示している。各下位事象についての説明が「コップが倒れた」「コーヒーがこぼれた」「本が汚れた」などの自動詞で記述されているため、ここでは他動詞の使用に焦点を当てる。回答で他動詞が使用されているということは、実験参加者が自動詞を他動詞に変換していることを意味す

るからである。また、他動詞の主語は、1人称（例：私がコップを倒して、…）あるいは3人称（例：隣の人がコップを倒して、…）の場合があるため、その区別もしている。

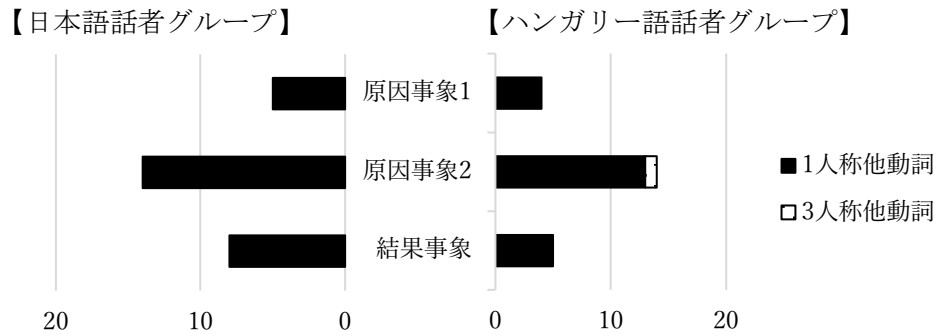


図4-1. 他動詞使用の累積数（内的／統制可能）（回）

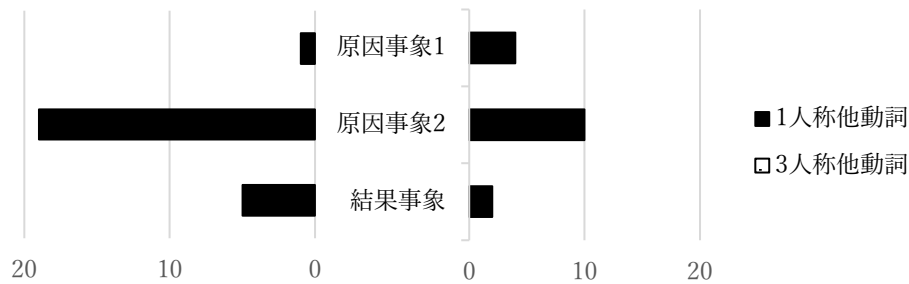


図4-2. 他動詞使用の累積数（内的／統制不可能）（回）

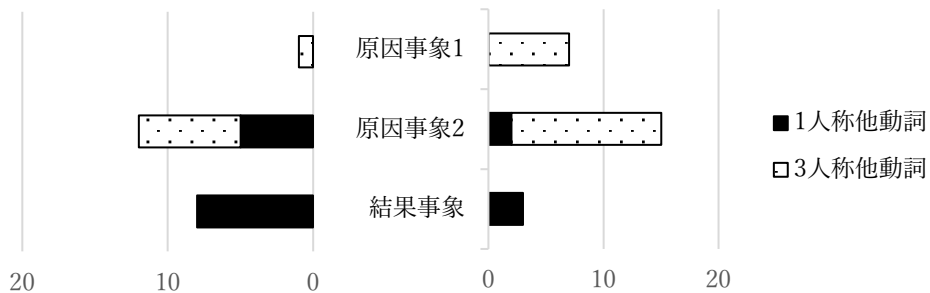


図4-3. 他動詞使用の累積数（外的／統制可能）（回）

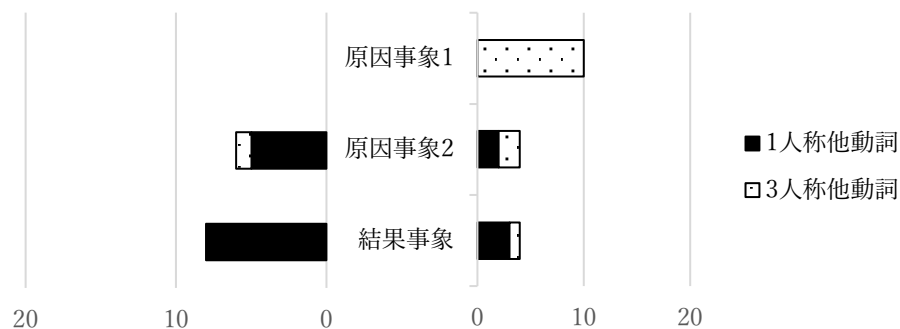


図4-4. 他動詞使用の累積数（外的／統制不可能）（回）

前節で見たように、下位事象への言及率は、どちらのグループも原因事象2「コーヒーの流出」がもっとも多かった。他動詞の使用のみに焦点を当てた図4を見ると、やはりどちらのグループも原因事象2への言及が多いことが見て取れる。しかし、日本語話者グループでは特に、外的×統制不可能な条件で結果事象「本の汚れの発生」への言及が原因事象2よりも他動詞での言及が多いことがわかった。一方、ハンガリー語話者グループでは、結果事象への言及は日本語話者グループほど多くなく、原因事象1「コップの転倒」への言及が日本語話者グループに比べて目立つ。特に、外的×統制不可能な条件での差は大きい。描写に用いられた他動詞の種類を見てみると、ハンガリー語話者グループでは、外的要因の条件には3人称が、内的要因の条件では1人称が用いられる傾向が観察された。日本語母語話者グループの回答においては、外的要因の条件でも3人称他動詞の使用は少ない。

5. 考察

5.1. 原因の所在と責任意識

まず、研究課題 1)「原因の所在が責任意識の知覚に関わるのか。それは日本語話者・ハンガリー語話者同様の傾向なのか」に対する回答について検討する。

責任意識は、いずれの条件においても、日本語話者グループのほうが、ハンガリー語話者グループよりも高く評定しているため、両グループが同じように責任意識を感じるわけではないといえる。しかし、責任意識の評定を条件間で比較すると、同じ傾向を示していた。このことから、話者の事態に対する責任意識は、原因の所在や統制可能性といった要因が関わっているともいえる。興味深いのは、原因の所在が外的なものの場合である。両グループで、統制可能な要因（第三者）の場合よりも、統制不可能な要因（突風）の場合のほうが、より責任意識が高いことがわかった。これは、他者であれば責任をその人に問えるが、自然現象に対しては責任を問えないので、自分自身に責任を帰属させざるを得ないと考えているからではないだろうか。この責任意識の高さが両グループに共通する傾向である点も興味深い。原因の所在が内的（自分自身）によるものなのか、外的によるものなのかの違いだけでなく、外的でも責任を問える実体か否かという点は、新たな条件とも言える。

さらに、責任意識とIFIDの使用の関連について見てみると、日本語話者グループでは、責任意識が高いほど定型的な謝罪表現を用いるという傾向が見られたが、ハンガリー語話者グループではその傾向は見られなかった。実際にIFIDを使用する割合は、日本語話者グループに比べ、ハンガリー語話者グループのほうが多い。このため、ハンガリー語の場合、IFIDの使用は責任意識の表明というわけではないといえる。一般的に、日本人はよく謝罪をすると言われ、ハンガリー人はあまり謝罪をしないと言われている。しかし、IFIDの使用割合だけを見ると、このステレオタイプとは異なるように見える結果である。謝罪表現がどの

ような意図で使用されているのかはさらに検討が必要であるが、日本人はよく謝するというステレオタイプが、実際の定型的な謝罪表現の使用頻度ではなく、責任意識を感じているかどうかの観察で構築されているのであれば、興味深い。どのような謝罪がステレオタイプを構築するのか、定型的な表現の使用だけではない考察が必要であることが示唆される。

5.2. 非意図的事象における言語表現

次に、研究課題 2)「日本語・ハンガリー語話者は同じように事態を説明するのか」について検討する。

4.3節にまとめたように、日本語話者グループでは、1人称他動詞を用いた、原因事象2「コーヒーの流出」と結果事象「本の汚れの発生」への言及がより多く見られたのに対して、ハンガリー語話者グループでは3人称他動詞を用いた、原因事象1「コップの転倒」と原因事象2「コーヒーの流出」への言及がより多く見られた。さらに、日本語話者グループの回答において、外的×統制不可能の条件で使用された他動詞のほとんどが1人称他動詞であったことは注目に値する。ここで、なぜ日本語話者グループで3人称他動詞がほとんど使われないのか、なぜハンガリー語話者グループで3人称他動詞を使う傾向が見られたのか、という2つの問いが浮かび上がる。

まず、日本語話者が、直接関与していないにも関わらず、外的×統制不可能条件で2つ目の原因事象「コーヒーの流出」あるいは結果事象「本の汚れの発生」の描写に1人称他動詞を使用する理由について検討する。この理由としては、日本語では無生物主語の構文使用に制約があることが挙げられる。つまり、「風がコーヒーをこぼした」とは言わず、実際のデータでは、「(私が) コーヒーをこぼした」あるいは「本を汚した」という表現が多く用いられている。もちろん、「(風で) コーヒーがこぼれた」という表現も用いられるが、それよりもあえて他動詞が選択される傾向が見られることについては説明が必要である。先行研究(水谷 1979, 吉成・パルデシ・鄭 2010)によると、1人称他動詞を含む表現は、責任意識を持つ表現として解釈することができ、本研究で得られたデータはこの主張を裏付けるものである。

一方、ハンガリー語話者が、外的×統制不可能条件で3人称他動詞を使用していたのは、無生物主語の他動詞文の制約がないことが要因の1つといえる。しかし、そもそも、ハンガリー語話者は結果事象ではなく2つの原因事象(「コップの転倒」および「コーヒーの流出」)により多く言及していたことから、結果よりもその事態が引き起こされた経緯に焦点があり、責任の所在(結果の引き起こし手)をはっきりと示す傾向があると考えられる。そのため、外的要因の条件下では、統制可能・不可能に関わらず、3人称他動詞の使用が多いといえる。

6. まとめ

結論として、因果関係のある事象連鎖の描写には、日本語話者とハンガリー語話者の間には根本的な違いがあることを主張する。まず、ハンガリー語の結果より、内的条件では1人称他動詞が、外的条件では3人称他動詞が使用されていることが明らかになった。これは、ハンガリー語では事実に正確な描写、つまり、誰が何をしたのかを特定することが重要であり、それが言語表現に反映されたからだといえる。一方、日本語では、話し手が事象に直接関与していなくても、1人称の他動詞を使用する傾向が見られた。その要因として、無生物主語の他動詞文の使用が限定されていることが考えられる。しかし、外的×統制可能条件（第三者が原因）でも、1人称他動詞が使用されており、かつ、その際の責任意識は条件間では一番低いものの、ハンガリー語話者の結果と比べると高く評定されている。そして外的×統制不可能条件（突風が原因）では、より1人称他動詞使用の割合が多くなっており、さらに責任意識も高くなっていることから、日本語の言語使用においては、責任意識、すなわち事象に対する認知が、事態の言語化を左右する重要な要素となっているといえる。

本研究では、ケーススタディとして1つのシナリオデータを分析したが、他のシナリオデータも分析することによって、本稿の結論を裏付ける証拠を得ることができる。今後の課題としたい。

註

- ¹ 本稿は、2018年9月に行われた 2nd International Conference on Sociolinguistics (ICS-2) において口頭発表した内容をもとに加筆修正し、論文化したものである。会場では数々の有益なコメントをいただいた。ここに記して謝意を表したい。
- ² 本稿の例文のグロスで使用する略号は以下の通り。なお、グロスでは形態素境界はハイフン「-」で、同一形態素内に複数の文法要素が含まれる場合にはピリオド「.」で示す。ACC: accusative（対格）、DEF: definitive（定活用）、IMP: imperative（命令形）、INTR: intransitive（自動詞）、NOM: nominative（主格）、PST: past tense（過去時制）、SG: singular（単数）TR: transitive（他動詞）。

参考文献

- 江口清子. 2015. 「ハンガリー語の自他動詞と項構造」 パルデシ=プラシヤント・桐生和幸・ナロック=ハイコ（編）『有対動詞の通言語的研究 -日本語と諸言語の対照から見えてくるもの-』東京：くろしお出版. 385-399.
- 羽成拓史. 2016. 「謝罪発話行為とポライトネス -データ収集方法の差異に着目して-」『経営学紀要』23. 117-131.
- 水谷修. 1979. 『話しことばと日本人：日本語の生態』東京：創拓社.

- 吉成祐子・パルデンシ、プラシヤント・鄭聖女. 2010. 「非意図的なできごとにおける他動詞使用と責任意識：日本語・韓国語・マラーティー語の実態調査を通じて」岸本秀樹（編）『ことばの対照』東京：くろしお出版. 175-189.
- Delancey, Scott. 1985. Agentivity and syntax. *CLS* 21(2), 1-12.
- Hinds, John. 1986. *Situation vs. Person Focus*. Tokyo: Kurosio Publisher.
- Hopper, Paul and Sandra Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56, 251-299.
- Ikegami, Yoshihiko. 1982. Indirect causation and de-agentivization: The semantics of involvement in English and Japanese. 『東京大学教養学部外国語科学研究紀要』29(3), 95-112.
- Jacobsen, Wesley. M. 1991. *The transitive structure of events in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Nishimura, Yoshiki. 1993. Agentivity in cognitive grammar. In Richard A. Geiger and Brygida Rudzka-Ostyn (eds.), *Conceptualizations and Mental Processing in Language*, 487-530. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Olshtain, Elite and Andrew Cohen. 1983. Apology: A Speech Act Set. In N. Wolfson. and E. Judd. (eds.). *Sociolinguistics and Language Acquisition*. 18-35. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Pardeshi, Prashant and Yuko Yoshinari. 2012. “An investigation into the interaction between intentionality and the use of transitive/intransitive expression: A contrastive study of Japanese and Marathi.” *Journal of Japanese Linguistics* 28, 77-88.
- Szili, Katalin. 2003. “Elnézést, bocsánat, bocs... [A bocsánatkérés pragmatikája a magyar nyelvben]” *Magyar Nyelvőr* 127, 292-307.
- Yoshinari, Yuko, Prashant Pardeshi. and Sung-Yeo Chung. 2014. “Usage of transitive verbs in the depiction of accidental events in Japanese and Korean.” *Japanese/Korean Linguistics* 21, 229-243.
- Weiner, Bernard. 1995. *Judgements of responsibility: A foundation for a theory of social conduct*. New York: Guilford.